

ロベルト・ユンク略年表

1913年、ベルリンに生まれる。
 1933年、ナチ政権成立後、パリへ亡命。反ナチ抵抗運動に関わりながら、チューリヒ、ロンドンなどでジャーナリストとして活動。のちにアメリカへ渡る。
 1952年、『未来はすでに始まった』を出版。ベストセラー作家になる。
 1956年、マンハッタン計画の科学者取材した『千の太陽よりも明るく』を出版。
 1957年、初来日。被爆後の広島を取材し、『灰燼の光』を執筆。
 1977年、『原子力帝国』を出版。ドイツ語圏の反原発運動に大きな影響を与える。
 1986年、オーストリアのザルツブルクに「ロベルト・ユンク未来問題図書館」を設立。ライト・ライブリフト賞受賞。
 1991年、オーストリア大統領選に出馬するも、落選。
 1994年、ザルツブルクにて死去。享年81歳。

『核の時代』にある私たちが向き合っていくべき課題ではないでしょうか。
 本展示では、ヒロシマから人類の未来への責任を問うたロベルト・ユンクの足跡を辿りながら、この問題を考えてみたいと思います。

『サダコは生きたい』となつて世界中に広まりました。
 第二次世界大戦の終結からまもなく七〇周年を迎えようとしている今、ヒロシマ・ナガサキの遺産をいかに引き継ぎ、世界にどのように発信していくかという問いは、いまなお

『灰燼の光』を何度か訪れ、被爆者と語り合いました。
 ユンクはその間、広島を何度か訪れ、被爆者と語り合いました。
 彼が著した『灰燼の光』を何度か訪れ、被爆者と語り合いました。

『核の時代』にある私たちが向き合っていくべき課題ではないでしょうか。
 本展示では、ヒロシマから人類の未来への責任を問うたロベルト・ユンクの足跡を辿りながら、この問題を考えてみたいと思います。

日本に縁の深い人物ですが、あまり知られていないかも知れません。
 このドイツ生まれのユダヤ人ジャーナリストは、
ヒロシマを世界に伝えることに半生を捧げました。
 若い頃、反ナチ抵抗運動に身を投じたユンクは、
 第二次世界大戦が終わると米国に渡り、
 そこで行われていた核実験の問題に向き合います。
 そしてヨーロッパに戻り、
 人間の未来を脅かす技術開発への盲信に警鐘を鳴らしながら、
多くの市民とともに反核・平和運動を進めていきました。
 ユンクはその間、広島を何度か訪れ、被爆者と語り合いました。
 彼が著した『灰燼の光』を何度か訪れ、被爆者と語り合いました。

関連企画 (いずれも予約不要・入場無料です)

■ 高校生のための金曜特別講座

会場：東京大学駒場1キャンパス 18号館ホール
 日時：2014年11月7日(金) 17:30~
 講師：石田勇治(本学教授)
 題名：「アウシュヴィッツからヒロシマ・ナガサキへ」
 ※詳細は高校生のための金曜特別講座ホームページ
 (<http://high-school.c.u-tokyo.ac.jp/>) にてご確認ください。

■ 駒場祭連携企画

シンポジウム「越境するヒロシマーロベルト・ユンクと原爆の記憶」
 会場：東京大学駒場1キャンパス KOMCEE レクチャーホール
 日時：2014年11月23日(日) 13:00~16:30
 パネリスト：石田勇治(本学教授)、若尾祐司(名古屋大学名誉教授)、
 川口悠子(法政大学講師)、竹本真希子(広島市立大学講師)、
 マイク・ハンドリック・シュプロッテ(ドイツ・ハレ大学講師)
 言語：日本語
 ※詳細は第65回駒場祭ホームページ (<http://www.komabasai.net/65/visitor/>)
 またはドイツ・ヨーロッパ研究センターホームページ
 (<http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/>) にてご確認ください。

■ ギャラリートーク

会場：東京大学駒場1キャンパス駒場博物館 1F 展示室
 日時：2014年10月25日(土)、川口悠子(法政大学理工学部専任講師)
 「『ヒロシマ』を個人史から読み解く：
 米国留学が可能にした被爆者救援」
 11月1日(土)、柳原伸洋(東海大学文学部専任講師)
 「『未来』はまだ終わっていない——
 原爆と空爆をつなぐ想像と思考の実験」
 11月8日(土)、猪狩弘美(東京大学大学院総合文化研究科特任研究員)
 「惨禍の体験とその後の苦難——
 ホロコースト生存者たちのたどった運命」
 11月15日(土)、竹本真希子(広島市立大学広島平和研究所講師)
 「ロベルト・ユンクが日本で見たもの」
 各回とも 14:00~
 ※詳細は東京大学駒場博物館ホームページ
 (<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp>) にてご確認ください。

